

## 三島由紀夫 「鏡子の家」論

——作中時間の構成について——

### 九 内 悠 水 子

はじめに

「鏡子の家」(S 34・9)は、三島由紀夫の作品の中で中期に位置付けられる長編小説である。「金閣寺」(S 31・1～10)、「水すぎた春」(S 31・1～12)、「美徳のよろめき」(S 32・4～6)と立て続けにベストセラーを出した後、約一年半の歳月をかけて書き下ろしたものであり、その創作過程の一部が記された随筆「裸体と衣裳」(S 33・4～7、9)を「鏡子の家」刊行に先立って発表するなど、早くから期待が寄せられていた作品であった。しかしながら、発表と同時に下された評価は、極めて低く、それは現在に至るまで変わっていない。

先行論では、「鏡子の家」が失敗作と見なされる要因の一つに、登場人物間の関係性の希薄さが挙げられてきた。田中西二郎氏は、「鏡子の家」が「かれら四人がそれぞれの生活の圏をもち、その圏

の拡大や収縮が走馬燈式に、磨きに磨かれた文体のリズムに乗って展開し回転する。これは簡潔さと複雑さとを一挙に手中に収める構成<sup>(註)</sup>であること、評価しつつも、決して交わることのない四つの物語があることを指摘する。又、村松剛氏も、「それに四人の男たちの物語をべつべつに書いたことは、やはり技法上の失敗だったろう<sup>(註)</sup>」と、個々の物語を別々に展開したことを批判している。このように従来の先行論では、四人の主人公がそれぞれ持つ四つの物語が、何らの統合性をも持たずに成立していると思なされてきた。果たして「鏡子の家」は、単に四つの男の物語を鏡子の家を中心に纏めただけの作品なのだろうか。本論では、この問題を、「鏡子の家」の間構造、とりわけ作中時間の流れに着目し、今一度考えていきたいと思う。

先行論において、「鏡子の家」の時間についてふれているものに、以下の三点がある。吉田昌志氏は、「『鏡子の家』における時間」という場合の「時間」の内容は、この小説を一読してあきらかなように、叙述の形式はあくまで古典的であり、作者の内的な時間を小説そのものの構造としないため、この小説の時間構造あるいは形式についてあまり多くを述べることはできない」として、四人の主人公の時間意識について考察をしている。対して、キルシュネライト氏は、「鏡子の家」で描かれる季節について、次のような見解を示した。

小説上の出来事は多くの場合春から夏にかけて起きる。峻吉について言えば、冬に起きるのは、花岡との契約、大学の卒業試験、そして原口の死といったものであるが、それらは何れも凡庸な日常性に過ぎない点で共通している。

收が冬に登場する唯一の場面は本間夫人との短いエピソードと鏡子との出会の場面だけである。それに対し清一郎の人生に於ては、重要事件はすべて冬に起きる。例えば彼の結婚式、藤子の不倫、或いはまた会社内での出世の見通しを約束する義理の父の社長就任、等々。

四季が象徴的意味を持つという仮説は、更に夏雄の物語を見

るとき一層確かなものとなる。夏雄についてはあらゆる事件は春から夏にかけて起き、「一つとして冬に起きるものはないのである。このことは「夏雄」という名前とも関連があらう。この作品に於ては、夏は、非日常的出来事の季節、凡庸な日常性から脱却した若くて美しい生の、戦いと死の季節なのである。それに対し、冬は日常性に属している。それは政治や経済の季節であり、醜く、年老いた、何れにせよ平凡な人間どものうごめく季節なのである。清一郎はこの世界に住んでいる。しかし、峻吉と收はこの世界とは殆ど関係を持たないし、天使のような存在である夏雄に至っては、このような日常世界の完全な外側にしか生きていない。

キルシュネライト氏は、實在時間には特記すべきような構造を見出すことが出来ないとした吉田氏に対して、四季の象徴性を主張した。氏が時間の分析を行つたことは評価できるものの、その主張が果たして妥当なものかどうかには、若干の疑問が残る。例えば、その一つが「夏雄についてはあらゆる事件は春から夏にかけて起き、一つとして冬に起きるものはない」という指摘である。夏雄が秋の展覧会に出品した絵が、N新聞社賞を受賞するのは一月のことであり、この受賞によって彼の運命は少しづつ変わり始めている。また、彼が水仙の花によって長らく陥っていた神秘主義から現実を回

復するのは二月の事なのである。四季の象徴というだけでは、齟齬が出てしまうと思われる。

又、佐藤秀明氏は、「鏡子の家」では時代や年齢や時間について、実感的で写実的な叙述の方法を採ってはいない。かなり自由な発想に基づいて、時間をフィクションナルに構造化しているのである<sup>(五)</sup>と指摘し、「そこに描かれた時代、年齢、時間の象徴的な意味」の解説を試みている。

ところで「鏡子の家」では、一九五四年から五六年にかけての二年間が、一部の回想、もしくは手紙と言った形で時間の逆転を除いてほぼ時間の流れに添って経過する。その時間の中で、鏡子と四人の主人公は、成功と挫折とでも言うべき体験をする。まず、四人の主人公の成功は「つまりみんな成功してゐるんだわ。誰も彼も巧く行つてゐるんだわ。峻ちやんは試合に勝ち、清ちやんは得になる結婚をし、夏雄ちやんは有名になり、收ちやんは筋肉をわがものにしたわけなのね」という鏡子の言葉に象徴される。しかしながら彼らの成功は、長くは続かない。六章以下、つまり第二部では彼らの挫折が次々と描かれる。峻吉は、日本フェザー級チャンピオンのタイトルを手にした晩、チンピラに絡まれて拳を潰しボクサーとしての道を断たれ、右翼団体に入団するに至り、清一郎は赴任先のニューヨークにおいて、同じアパートの住人で同性愛者のフランクに妻を寝取られる。夏雄は展覧会の為のスケッチに行つた富士で樹海を見て以来、神秘主義にはま

り、絵が描けなくなるし、收は母の借金のために醜い女高利貸しの清美の愛人となりついには彼女と心中してしまふ。これらを時間順に並べ直し、且つ、テクストに織り込まれた多くの時事事件を参考に、四人の主人公がどの時期に成功と挫折を経験したのか割り出すと、ある共通点が浮かび上がってきた。結論から先に言えば、この、四人の主人公及び鏡子の持つ時間の類似性こそが、この物語を統合する機能を持つていると考えられるのである。以下、具体的な検証に移る。

## 二

夏雄の場合、運命は次のように展開される。

一九五四年「七月に入つた或る日」夏雄は、秋の展覧会の画材探しに深大寺へ向かう。そこで彼は、落日を見、これを描くことに決めた。完成した絵を夏雄は、展覧会に出品した。

夏雄の「落日」は秋の展覧会で非常な評判をとつた。(五)

今年に入つて勿々「落日」がN新聞社賞を受けたので、夏雄は世間的に有名になつた。たくさんの人に会つたり話をしたりする折が多くなつた、彼はすぐさういふ生活に飽きた。(五)

この絵は、一九五四年秋の展覧会で評判を取り、翌五五年の一月

にはN新聞社賞を受賞、彼は一気に名声を手に入れる。名声を手に入れた夏雄はこれに興味を示すでもなかったが、好むと好まざるとに関わらず、彼は有名人となり、有名税とでも言うべき体験をすることになる。

「あれ、たしかに、山形夏雄だわ。売り出したと思つて、いい気なもんね」

夏雄はわが耳を疑つた。この種の言葉を人の口からきいたことがなかつたのである。

自分が傷つくよりも先に、彼を愕かせたことは、何一つ悪いことをしないのに、自分の些細な名声が、世間のどこかである若者たちを傷つけてゐたといふ発見である。

この若者たちに、自分が確実に愛されてゐないといふ思ひは、大袈裟にいへば一種の失寵のやうに彼の心に響いた。(五)

夏雄は、自分の知らない人からの、自分に対する陰口を聞くのである。彼はこれまで、誰からも愛される人間であることを疑わなかつたが、そうではなかつたことを知つたのであつた。しかし彼は、次の絵に挑戦する。一九五五年「七月十日」、夏雄は再び、秋の展覧会の為に、今度は富士の樹海へと出かけた。そこで彼は、樹海を見て戦慄する。今まで夏雄の目に見えていた単純で簡素で秩序だつ

た世界が消え失せてしまつたのである。彼は、絵が描けなくなつてしまい、それまで度々手紙を寄越した中橋房江に助けを求める。房江はそんな彼に神祕の世界を知らしめ、やがて夏雄はこの神祕の泥沼にはまり込んでしまう。夏雄は、鏡子の家を最後に訪問した際、鏡子に、「僕が一日一日現実を快復して、今かうして君の前に元気な姿を見せられるまでになつた二ヶ月間については、そんなに詳しく話す必要はないだらう」と語っていることから、五六年二月までの約半年の間、この泥沼にはまりこんでいたのであつた。

次に、收について見てみたい。彼の運命は次のように展開される。無名の新劇俳優である收は、自分の顔に絶大なる自信を持つており、鏡でその美しい顔を見ることで己の存在の確認をしていた。しかしながら、情事の際、光子に貧弱な肉体をからかわれ、これを鍛えようと決心する。彼は、肉体は顔と違つて鏡を使わずとも、自分の目で見る事が出来る、自分の存在の堅固な証明を眺める事が出来る、と考へたのである。こうして一九五四年「五月はじめ」、收は大学の先輩である武井に手ほどきされ、重量挙げを始めた。「骨が太い」から心配することは無いという武井の言葉通り、收は見違えるほど逞しくなる。

そこには新たに生れた筋肉が輝やいてゐた。あれほど無為に馴れてゐた彼が、ここ三月半といふもの、一週三回つづを欠かさずに、ジム通ひをつづけてかうなつたのである。依然として

舞台の役がつかぬあひだに、一方微妙な確実さで、筋肉は増して来てゐた。筋肉はすこしづつ空気を彼の輪郭の周囲へおしつけてゐた。彼はしばらく自分の顔を愛することを休んで、かうして盆栽のやうにわが手で養つてゐる筋肉のはうを愛した。(三)

右に挙げたのは、民子の別荘での記述である。「三月半」という記述から、八月下旬であることが分かるだろう。このように、肉体を手にした収は必然的に、ジムの仲間たちと過ごす時間が増えてゆく。彼の母は、金貸しから借りた資金を元に服飾店を喫茶店へと改装していたが、この店へ収はジム仲間を連れて来ていたのである。

かういふ連中とゐるとき、収は疑ひもなく幸福だつた。彼を決して訪れない「役」のことを思ひ煩ふ必要もなかつた。筋肉はどんな野心の代りをもしたのである。(五)

収とジムの仲間、つまり収と「筋肉の友」との会話の中に、ソ連首相マレンコフ辞任の話題が出てくる。また、これが「一十月半ばかりも前の古いニュース」であるという記述があることから、この時期が一九五五年の三月下旬であることが分かる。収が筋肉を手に入れてから約半年、彼は、役がつかないことを思い煩ふ必要もなくなり、幸福を感じていた。しかしながら、そこへ訪ねてきた夏雄と

武井の会話の中で、この後収が体験する恐るべき事件の予言が次のように成されるのである。

夏雄はこんな議論に子供らしい危険を感じた。第一、芸術作品とは、目に見える美とはちがつて、目に見える美をおもてに示しながら、実はそれ自体は目に見えない、単なる時間的耐久性の保障なのである。作品の本質とは、超時間性に他ならないのだ。もし人間の肉体が芸術作品だと仮定しても、時間に蝕まれて衰退してゆく傾向を阻止することはできないだらう。そこでもしこの仮定が成立つとすれば、最上の条件の時における自殺だけが、それを衰退から救ふだらう。(中略)

たうとう耐へかねて、夏雄はかう言つた。  
「そんなに筋肉が大切なら、年をとらないうちに、一等美しいときに自殺してしまへばいいんです」

夏雄の語気はいつになく強く、いつになく怒気をあらはにしてゐたので、一同が黙つて顔を見合はすよりさきに、こんな夏雄をはじめて見る収が、愕きの目を向けた。(五)

果たして収はこの予言通り「二等美しいときに自殺」してしまふ。収の母が借りた金は、利息を払いに行かなかつたために元金の二倍に膨れ上がり、店には愚連隊が借金の催促に度々訪れるように

なっていた。窮してしまつた親子であつたが、醜い高利貸しの女清美は、收の体を譲渡すれば、借金は帳消しにしてもよいと提案をし、收はこれを承諾する。こうして清美の情夫となつた收は、清美との逢い引きを続けるうち、彼女と共に怖ろしい遊戯にのめり込むようになる。死の直前、收は、一九五五年八月の千秋楽附近の歌舞伎座公演を母と見に行つた。そして鏡子の家で、快樂の秘密を鏡子に語り残し、情死を遂げたのである。

続いて、清一郎について見てみよう。彼の運命は次のように展開される。

式場は明治記念館、披露宴は帝国ホテルの孔雀の間に決められた。藤子の意見で宴はカクテル・ピュフェの形式になり、招待状が五百人に出された。このうちで庫崎家の客が四百五六十人を占めてゐたが、これだけの人数に絞るのも容易ではなかつた。仲人には庫崎の先輩で元総理大臣で、今度の新党準備会の代表委員の一人である大垣弥七夫妻が立つた。(四)

山川物産副社長庫崎弦三の娘藤子と清一郎の結婚式は、一九五四年十二月七日に行われた。この日、新党準備会の代表を務める仲人、大垣弥七の政敵である吉田茂が内閣総辞職をし、清一郎夫妻は、幸先のいいスタートを切ることになった。やがて清一郎は、英

会話の能力を評価され、ニューヨークへ転勤する。

鏡子宛の手紙は細大洩らさぬ身辺報告で、薄い航空用便箋に正確な細字が詰つてゐた。

「どうして僕がニューヨークへ転勤するやうになつたか、その詳しい事情は発つ前に話す暇がなかつた。これは要するに僕が従順で優秀だつたからにすぎず、自分から汚い運動なんかしたわけではない。

君も知つての通り、僕は朴訥この上ない青年で、しかも英語が少々喋れるのだ。外国語の会話が出来るとは通例軽薄な能力と考へられてゐるのに、僕はその例外なんだ。いつか読んだ「マクシム」の中に、痛いことが書いてあつた。「さも朴訥らしく装ふのは、微妙なベテンである」とさ。(後略)(一六)

右に挙げたのは、ニューヨーク行きの上で書いた清一郎の手紙である。峻吉は、鏡子に、清一郎からきた手紙を読みに来ないかと誘われて鏡子の家を訪問し、峻吉宛や鏡子宛の手紙を読む。峻吉が鏡子の家を訪問したのは、その前後にある夏雄・收の話から考えて一九五五年七月始め頃と考えられる。また、一九五五年四月二日に行われた峻吉の試合の日、清一郎が鏡子に「もうぢき、外国へ行くことになるかもしれないんだ」と告げていることから、清一郎が

ニューヨークへ赴任したのは一九五五年六月頃のことと推測されるのである。この、機上からの清一郎の手紙は更に次のように続く。

かうして僕のニューヨーク転勤は、上層部では早々と決つてしまつた。

それから忽ち僕の周辺で妨害工作がはじまつた。同じ課の間が、「あいつはスタンド・ブレイをしてゐる」と隣の部へ行つて言ひふらす。更に僕に対する推挙の聲があつた傍系会社へまで行つて、「あの男には氣をつける。実に冷たい男で、君ら知らん顔をして、五万や十万のミスさへカヴァーしてくれず、みんな君らの責任に押しかおせる男だ」なんぞと言つて廻る。

つひに人事部長のところへまで、僕のことを、リベート取りの常習者だといふ投書を出した男がある。もちろん匿名でだ。人事部長はもともと常務と同期なのだが、自分が非現業で冷飯を喰はされてゐるといふ怨みが、こんなときに急に募つて来て、僕の海外勤務について最終決定権のある常務に插つくために、投書や噂の数々を持ち出してきて反対した。(一六)

ニューヨーク行きは栄転であつた。しかしながら、藤子との結婚によつて「評判が幾分か落ちた」ものの、「単純な快男児タイプ」

として概ね社員から好印象を持たれていた清一郎の社内での立場は、この栄転によつて一転してしまふのである。ともあれ、辞令は下り、清一郎はニューヨークへと旅立つ。栄転先のニューヨークでは悲劇が待ちかまえていた。一九五五年十二月、清一郎のシカゴ出張中に妻藤子が過ちを犯したのである。不義の相手は同じアパートの住人で同性愛者のフランクだつた。その事実を清一郎は知つていたが、藤子は知らなかつた。同性愛者に自分の妻を寝取られるという「風変つたコキエ」体験は、清一郎が思つていた以上に、自身を傷つけた。「格好な切り札」つまり、フランクが同性愛者という事実を知つていたにもかかわらず、妻の不貞という事実は、鏡子や、山川夫人に洗いざらいぶちまけなければならなかつたほど、彼に重くのしかかつてきたのである。

最後に、峻吉について見てみよう。彼の運命は次のように展開する。一九五五年四月二四日、峻吉のプロ転向第一戦目が行われた。相手は元全日本フェザー級チャンピオンの南猛男で、現在はランキング九位、引退間近という噂の出ているボクサーであつた。峻吉はあっさりと二ラウンドでKO勝ちする。プロ転向戦からわずか半年後の一九五五年十月に、峻吉は全日本フェザー級チャンピオンに挑戦することとなつた。これは、持ち駒の少ない八代拳が売り急いだためでもあるが、夏までに八回戦で二度勝利を取めた峻吉には挑戦者の資格があつた。当然のごとく峻吉は勝利を収め、タイトルを手

し、チャンピオンベルトを与えられる。スポンサーである東洋製瓶社長花岡と、八代華会長に連れられ、酒場やキャバレエをまわった彼は、行く先々で、祝杯を挙げられたり、握手を求められたりという歓迎にあつた。しかしながら、峻吉にも悲劇が待ちかまえていた。皆と別れた後ふらりと入った酒場でチンピラに絡まれ、拳を潰してしまうのである。こうして、ボクサーとしての前途を断られた峻吉は、大学の応援団長であつた正木に勧められるまま、右翼団体の盡忠会に幹部団員として入隊するのである。

「峻ちゃん！峻ちゃんぢやないの」

光子は峻吉だと知ると、忽ち幻想を破られた感じがした。しかし制服を着た峻吉の顔には、野卑なまなましい精力が溢れてゐた。制服がはち切れるほど肥つたその体は、二人の女の前に屹立して、体全体で何か屈辱的なことを命令してゐるやうに見えた。(十)

一九五六年四月始め、鏡子の家を訪問し、鏡子から、夏雄と関係を持つたこと、また夫が帰ってくるので以後友達付き合いはしないことを告げられた光子と民子は、その帰り道で、盡忠会の仲間と共に信濃駅前にいた峻吉を目撃する。制服に身を包まれた彼の体は肥りきつており、かつてのスポーツ選手の面影をそこに見出すことが

出来なくなつていたのであつた。

### 三

以上の検証から、冒頭で挙げた四人の主人公の共通点がおのずと明らかになる。彼らはすべて、一年をサイクルにして、その成功と挫折が描かれているのである。そして、それぞれの中間地点、つまり、成功から約半年で、運命が頂点を極めていることに気付くであろう。更には、それぞれの頂点を極めた運命の背後に、例外なく、やがて来る下降の兆しが現れている事も指摘できる。また、この軌跡は、鏡子についても同様のことが言えるのだ。鏡子の運命の変化は、冒頭、中盤、結末において起きる三件の情事に見て取ることが出来る。

一度目の情事は、一九五四年四月はじめ、箱根のホテルで起きる。夏雄、收、峻吉、光子と民子そして鏡子の五人は、箱根へ旅行に出かける。ホテルでは、收は光子と、峻吉は民子と同室であつたが、夏雄と鏡子はそれぞれ別室を取る。その夜、鏡子は夏雄の部屋を訪れた。しかしながら、童貞である夏雄は鏡子と関係を持つたことを逡巡し、鏡子も強いて求めることはせず、関係は成立しなかつた。

二度目の情事は、峻吉の祝賀会が行われた一九五五年四月二四日、鏡子の家で起きる。峻吉と光子はすでに奥の日本間の床の中であつたし、民子と收そして夏雄はナイトクラブへ出かけてしまつていた。居間で、清一郎からニューヨークへ転勤するかも知れないと



## おわりに

以上見てきたような「鏡子の家」における時間構造は、どういう意味を持つのだろうか。「鏡子の家」創作ノート」からは、作者が作中時間をどのように構成していったのか、その一端を確認することが出来る。これによると、当初は昭和二十九年四月から同三十三年四月までの四年間で構想構想されていたことが分かる。そして、四月と設定していた清一郎の結婚を、十二月へと変更、又、一月に神秘主義の虜になるはずの夏雄も、それが七月へと変えられている。これらの変更によって、四人の主人公の運命サイクルが一年へと整合化されたと考えられる。つまり、作中時間を、一年ないしは二年と、四人の主人公及び鏡子に平等に与え、且つそれらを順々に配置することで、作品を統合させているのだと言える。

このような、三島の時間意識は、「禁色」創作ノート」にも見ることが出来る。昭和二十五年に書かれた創作ノートは「禁色」ノート」および「他作品のためのノート」が混在し、特に後扉から始まるノートの冒頭には作品としては存在しない「饗宴」の構想が書かれている。そして、この「饗宴」の腹案としてメモされた部分には、三島自身が後に述懐述べしているように後の長編「豊饒の海」へと繋がる、「時間」についての記述が見られる。そして私は更にここには、「鏡子の家」における「時間」についての記述も読みとれる

のではないかと考える。

◎同時性 一定時間⇨持、時間を一人一人等分に与へ、それをいかに合すか？将棋と同じ。↓フツウの小説もさうである。  
△時間をどう使ふか？一定の同盟の青年たち  
しかも個々別々の物語をもつ。同盟の不可能。

右の一節は先に述べたように「饗宴」の構想メモであり、「鏡子の家」にも通じているのではないかとと思われる部分である。「鏡子の家」では、四人の主人公それぞれの物語を裁断しつつ描きながら、「一定時間」として、一年という持時間を一人一人等分に与え、同時性を持たせている。少なくともここに、四つの物語を時間によって統合しようとした三島の意図を見出すことができるだろう。先に触れたが、三島が「豊饒の海」の構想に着手し始めたのが昭和十五年である。これは「鏡子の家」が出版され不評が相次いだ時期とちょうど重なる。「鏡子の家」では認められなかった、この時間が構成が物語を統合するという試みは、生まれも育ちも無関係な四人の少年少女らが、二十年の生涯という共通の持時間を与えられ、次々と転生することで物語が繋がってゆく「豊饒の海」の時間構成へと受け継がれていったのではないだろうか。

構成の優劣と作品の評価は必ずしも一致しない。そういった意味

で「鏡子の家」は失敗作であったという評価は免れ得ないのかも知れない。しかしながら、三島文学を通して考えるならば「鏡子の家」はもつと重要視されていいはずである。特に「豊饒の海」へ至る過程としては、内容・方法そのいずれにとつても看過できない問題を含んでいるのではないだろうか。

小説を書くにあたって三島は構成の問題、つまり方法論に対して非常に固執していた。彼は、「小説固有の問題」は、「われわれが生きながら何故又いかに小説を書くか」という問題、「われわれが生きながら何故又いかに芸術に携はるか」という問題に帰着する、として次のように述べる。<sup>注</sup>

小説とは、本質的に、方法論を模索する芸術である。戯曲のやうな方法論と型式を自らのうちにそなへた芸術とちがふところだ。ブルウストの「失はれし時」は、話者がこの方法論を発見するところで巻を閉ぢる。

「鏡子の家」は、この三島の文学論を説明する重要な作品として、また「豊饒の海」へ至る過程として、もつと評価されるべきである。石崎等氏<sup>注七</sup>をはじめとして、「鏡子の家」と「豊饒の海」の関連を深く研究もなされてはいるものの、いずれも人物論と絡めた方向のもの、言うなれば内容論に限られており、方法論における比較検討

はまだ十分とは言えない。今後は、「鏡子の家」創作ノート」の分析のみならず、他作品のノートも含めた総合的な検証により、三島文学における「鏡子の家」の位置づけを図ることが必要となつてくると思われる。

注

- (一) 田中西二郎「解説」(S39・8 新潮文庫)
- (二) 村松剛「三島由紀夫の世界」(H2・9 新潮文庫)
- (三) 吉田昌志「三島由紀夫論―『鏡子の家』を繞つて―」(S54・3「青山語文」9)
- (四) イルメラ・日地谷IIキルシュネライト(相沢啓二訳)「象徴のアラベスク―『鏡子の家』の解説」(S61・5「ユリイカ」18(5))
- (五) 佐藤秀明「移りゆく時代の表現―『鏡子の家』論―」(三島由紀夫論集1三島由紀夫の時代)へH13・3 勉誠出版)所収)
- (六) 但し、四年から二年への変更を示唆する箇所は、全集に抄録された「創作ノート」には見あたらない。何故四年を二年に縮めたのか、その理由を求めることは容易ではないが、中野好夫の論文タイトル(「文芸春秋」S31・2)であり、昭和三十一年七月に出された経済白書にも採用された「もはや戦後ではない」に象徴される、混乱期から転換期へという時代背景もその一つとして考えられるだろう。
- (七) 田中美代子「解題」(決定版三島由紀夫全集第七巻)
- (八) 三島由紀夫「『豊饒の海』について」(S44・2・26 毎日新聞)
- (九) 三島由紀夫「小説家の休暇」(S30・11 講談社)
- (十) 石崎等「審美的ニヒリズムの終焉」(「日本文学研究資料叢書 三島由紀夫」へS46・11 有精堂)所収。石崎氏は「春の雪」に夏雄を、「奔

馬」に峻吉を、「天人五衰」に收を、そして本多に清一郎を辿っている。これに対し、奥野健男（『鏡子の家』と『豊饒の海』——三島由紀夫論のうち——S 58・10 『文学界』 37(10) 氏は、「春の雪」に夏雄を、「暁の寺」に鏡子を、「天人五衰」に清一郎を辿れるとしている。

本稿は、平成十三年度広島大学国語国文学会春期研究集会（平成十三年度六月十七日 於広島大学）における口頭発表に加筆したものである。席上、ご教示頂下さった皆様に厚く御礼申し上げます。

「鏡子の家」本文、及び「創作ノート」は『決定版三島由紀夫全集』（H 13・11、新潮社）に、その他の三島由紀夫の文章は全て『三島由紀夫全集』（S 48・4、51・6 新潮社）に拠る。引用文中の傍線は私に付した。

—くない・ゆみこ、本学大学院博士課程後期在学—